丹波市立鴨庄小学校 学校だより 令和４年 12 月 18 日号

元気 根気 やる気 鴨庄っ子

「鴨庄小学校」の歴史　その1

鴨庄小学校の歴史について、3回に分けて連載します。簡単な文章にしています。児童にも読み聞かせてください。

「雲集舎」「研習舎」「正法寺」

400年ほど前、江戸時代に「だれでも勉強することが大切だ」という考え方が広まり、今でいう塾(じゅく)のような「寺子屋(てらこや)」が日本各地にできました。鴨庄にも三つの寺子屋が開かれました。

「雲集舎」➡上牧の吉見医院、
「研習舎」➡喜多の岩戸寺、
「正法寺」➡北奥の正法寺

この3か所で、お医者さんや、お坊さんが先生になって、読み・書き・そろばん(計算)を教えました。勉強した子どもは、本が読めたり、手紙が書けたり、計算ができたりするようになりました。そのころの子どもは、家の仕事を手伝ったり、子守りをまかされたりしていたので、わずかな一部の子どもだけが寺子屋に通いました。

六カ村組合立上村学校

175年ほど前、明治時代になると、国は6歳以上の男女すべてに、学校で4年間勉強するようにいいました。およそ人口600人ごとに１つの小学校をつくることになり、喜多村、岩戸村、牧村、上村、奥村の6村で「上村学校」をつくりました。場所は、今の牧南公民館のあたりに、建物は「研習舎」の建物を移しました。現在、その場所には石碑(せきひ)が残されています。

その後、戸平村に世話係1名と先生1名が派遣されました。小さい子が峠を越えることがむずかしかったからです。また、明倫小学校(吉見)に通っていた南村の子らも上村学校へ通うことになり、今と同じ学校区になりました。

先生のお給料も自分たちで払う時代でした。そのため、子どもが授業を受けるには、小学校で月に10,000 円程、中学校で月に 110,000 円程の授業料がかかりました。その頃もまだ、子どもは働き手であり、高いお金をはらってまで学校に通わせる親は少なく、学校に行ったのは一部の子どもたちだけでした。始めの年は、児童56人、先生1人でした。

鴨庄尋常(じんじょう)小学校

130年前、明治25年に「鴨庄尋常小学校」という名前になりました。1つの村に1つの小学校と決められたからです。児童も増え続け100人を超えたので、今の小学校の場所(上牧)に校舎をつくりました。国が出してくれるお金はわずかで、みんなでお金を出し合って校舎や教室をふやしていきました。

鴨庄尋常小学校

122年前、明治33年に、小学校の授業料がいらなくなるきまりができました。すべての子どもが学校へ通うことができるようになったのです。児童数は200人を超え、先生は5～6人でした。同じころ、福知山まで鉄道が通り、自転車や車も走るようになってきました。人々の生活が、いっきに変わっていきました・・・1月号につづく。

(文責:学校長)

明治41年卒業生

丹波市立鴨庄小学校 学校だより 令和５年１月 18 日号

元気 根気 やる気 鴨庄っ子

「鴨庄小学校」の歴史　その2

前回の要約

400年前に3つの寺子屋ができました。明治7年に1つの学校「六カ村組合立上村学校」がつくられ、その年を創立としています。明治25年、「鴨庄尋常小学校」と改称されました。

楽しい行事「土祭り」

明治7年創立のころ、本校で大事にされていたのは、①家庭やふるさとの教育、②国への貢献・社会道徳、③児童の個性を尊重した能力に応じた教育、でした。時代特有のものもあれば148年間変わらないものもあります。

11月の「土祭り」は、秋の収穫を祝う学校恒例行事でした。祭壇に祭（まつ）られた土に、全校生が礼をして土に感謝することから始まり、農作物の品評会、学校で収穫した新米を炊いた楽しい昼食会、そして午後は学習発表会をしていました。

学校では、勤労教育に「螟卵（めいらん）採集」を取り入れていました。農作物を食べてしまう青虫の卵の除去です。鴨庄村内の畑にも出かけていたので、秋の収穫は、学童にとってもうれしいことでした。

「山東六カ村小学校合同運動会」は、春・秋の2回開かれていました。参加校の竹田・前山・吉見・鴨庄・三輪・春日部が順に会場校になりました。

この他、修学旅行が始まったこと（明治34）、寄附で運動場に鉄棒・ブランコ・回旋塔が置かれたこと（大正3）、寄附で楽器一式を購入して音楽隊ができたこと（大正6）、などが記録に残っています。学校に行けば、家にはないものがたくさんあり、それだけでも、学校は特別な、楽しい場所であったと言えます。

戦時中の学校

明治23年「教育勅語」公布以来、愛国国家思想が基本とされ、子どもにも国に尽くすことが期待され、様々な軍事教育を受けました。

訓練、勤労、礼儀、規律を重視し、国語の教科書には「戦地の父から」「飛行機の整備」などの読み物教材が、音楽では「戦友」「白衣の勧め」等の唱歌、体育では剣道や薙刀（なぎなた）などが課せられました。

【運動場で戦没者の合同葬儀】

昭和17年になると本土への空襲が始まり、昭和19年以降は激しさを増し、全国各都市が爆撃を受けました。そこで、小学3年生以上の学童たちを安全な地方へ一時的に避難させる「学童疎開」が開始され、鴨庄は尼崎市竹谷国民学校を受入れ正法寺と長明寺が宿舎になりました。

昭和20年8月15日、太平洋戦争は終結しました。

「愛国主義」や「国家主義」といった国家に対する忠誠を理念の中心とした教育は、戦後、「人格の形成」や「個人の尊厳」を理念の中心としたものとなりました。

鴨庄小学校でも、児童の自治活動を重視。学級を設け、学校児童会を立上げました。5.6年生で臨海学校が始まり、中断していた修学旅行も再開されました。昭和26年には新校舎が建てられました。

赤い瓦屋根のモダンな校舎でした。そんな矢先、大惨事が起こりました・・・

2月号につづく。

（文責：学校長）

丹波市立鴨庄小学校 学校だより 令和５年２月 18 日号

元気 根気 やる気 鴨庄っ子

「鴨庄小学校」の歴史　その3

戦後復興の中、昭和26年には赤い瓦屋根のモダンな校舎が建てられました。**ところが！**

台風15号の爪痕（つめあと）

昭和29年2学期、台風15号の通過後、学校は大変なことになっていました。新築校舎の屋根が暴風で飛ばされ、教室がむき出しになったのです。しばらく休校になり、体育館をカーテンで間仕切りした教室が準備されました。半年間、仮の教室で授業を受けましたが、テレビや遊具も少ない時代ゆえに、学校が大好きな児童ばかりでした。4月に修復され、通常の学校生活にもどりました。市島町発足の昭和30年でした。

強い地区の結束

運動会の地区対抗リレーには、力が入りました。結束力は強く、対抗意識もありました。絆は登下校でも深まり、朝、公民館に集合し、行きながら、途中の神社に寄って遊び、竹やぶに入っては遊び、学校に着く頃には遊び疲れていました。下校でも、山に入り、秘密基地でひとしきり遊んでから、帰っていきました。

子どもも活躍した農繁期

鴨庄は有機の里、ずっと農業が盛んです。青虫の卵取り（螟卵採集）は地区担当の先生に引率され、地区に分かれて実施。螟卵や蛾を買い上げてもらい、わずかなお金をいただけるので競争して頑張りました。特に、田植え時は、朝の4時から晩は7時過ぎまで作業があるので、小学生にも1週間の田植え休みがありました。田の綱引き、苗配り、子守りなどを手伝いました。なかに、手間どった家があると、早く済んだ人たちが、みんなで手助けに行って植えました。

夏の思い出・冬の思い出

【夏の思い出】長らく、神出橋下で水をせき止め、水泳（水遊び）をしていました。深さは胸のあたりまであり、溺れかけたこともあったとか。その後、金魚を飼われていたお宅の大水槽を夏の間だけ借りての水泳授業に変わりました。プールは昭和44年に新設されました。

【冬の思い出】それは、温かいお弁当です。登校すると、アルマイトのお弁当箱を、暖の上で温めました。当時、鴨庄では松茸がたくさん採れ、「また松茸ご飯か…」と飽きるほど食べられていました。4 時間目になるといい臭いがしてお腹もすき、授業に集中できませんでした。お弁当箱は似たものが多く、取り違えて食べてしまうこともありました。

高度経済成長期～現在へ

高度経済成長期に入り、学力向上に重点がおかれ今日に至っています。また、社会が複雑化する中で情報化、国際化、高齢化への対応が急務となり、多くの課題教育（福祉・環境・情報・食育 etc.）を導入。余暇を活用した文化社会への積極的な対応も求められました。社会では、週休2日制の導入が定着しつつあり、平成14年度より公立学校で完全実施されました。

地域に根差し思いやりに満ちた学校環境づくりをめざす鴨庄小学校には、多くの地域支援者がかかわってくださり現在に至っています。「元気・根気・やる気の鴨庄っ子」を合言葉に、小規模校としての特性を生かした教育は実を結び、卒業生は皆、地域を愛し、地域を誇りに思い、今日も地域に貢献されているのです。　　（文責：学校長）